

# フランス語とイタリア語における 定冠詞の分布について

藤田 健

## Distribution of the Definite Articles in French and Italian

Takeshi FUJITA

**要旨** : The definite article occupies the primary position in the article system in French and in Italian. We examine the syntactic distribution of the definite article in a corpus (a French text and its Italian translation, and an Italian text and its French translation), taking into account the distributional correspondence between the definite article and other determiners, the null article included. We conclude that the definite article has a close connection, especially in Italian, with the null article and a certain functional continuity with the indefinite article. It is also shown that the Italian definite article assumes a part of the functions of the possessive adjectives in French.

**キーワード** : definite article, French, Italian

### 1. 序論

冠詞という文法カテゴリーを有する言語において、この要素は名詞句において極めて重要な文法的役割を果たす。その中でも、ロマンス諸語は冠詞体系が発達している言語群であると言えるが、個々の冠詞の機能についてはグループ内で差異が観察される場合がある。フランス語とイタリア語は同グループの中でも、冠詞の体系化が進んでいる言語であると言える。それぞれの言語において冠詞について様々な観点から研究が進められているが、言語間の対照的視点からの研究はあまり進んでいないのが現状である。

冠詞の中でも、定冠詞は多くの機能を有し、最も使用頻度が高い要素である。定冠詞の機能を考察する上では、定の決定詞としての位置づけが極めて重要である。定の決定詞全体の中で定冠詞の分布・機能を考察することによって、はじめて明らかになる本質が存在する。本稿では、フランス語とイタリア語の定冠詞の機能を対照的に考察すべく、その分布を詳細に検討し、指示形容詞や所有形容詞といった他の定の決定詞との対応に焦点をあてて分析を進めていく。これにより、定冠詞・不定冠詞・部分

冠詞という冠詞体系内のみでの考察ではとらえられない定冠詞の特質を明らかにしたい<sup>1</sup>。

## 2. 両言語における定冠詞の位置づけ

ここでは、フランス語とイタリア語の定冠詞が従来どのように分析され、どのような形で位置づけられてきたかを見るために、先行研究を概観する。

### 2.1. フランス語

多くの記述文法や論考において、フランス語は3種類の要素からなる冠詞体系をもつとされている。すなわち、西ヨーロッパの諸言語に一般的に見られる定冠詞・不定冠詞に加え、部分冠詞というカテゴリーが設定される<sup>2</sup>。

Grevisse(1993)によると、定冠詞の機能は、発話者(locuteur)と対話者(interlocuteur)のいずれにも既知である人やモノを指示する名詞の前に置かれるとする。具体的には、両者に共通の経験の一部をなす実体、状況によって同定可能な実体、名詞を修飾する補部によって同定可能な実体、不定冠詞で導入された実体を表す名詞に前置される(p.865)。

(1) a. Le soleil luit pour tout le monde.

the sun shines for everyone “太陽は皆のために輝く。”

b. Donnez-moi la clef.

give me the key “鍵をください。”

c. J'ai pris la route qui conduit à Reims.

I took the route which leads to “私はランスに通じる道を通った。”

d. Il était une fois un Bûcheron et une Bûcheronne qui avaient sept enfants,

it was a time a woodman and a wife of a woodman who had seven children

tous garçons... on s'étonnera que le Bûcheron ait eu tant d'enfants en si

all boys one will be surprised that the woodman has had so many children in so

peu de temps.

little time

“昔、七人の子供をもつ樵とその妻がいました。すべて男の子でした。そんなに短い期間でそれほどの子供ができたことに驚かれるでしょう。”

種(espèce)・カテゴリーを対象とする用法も指摘している。

(2) Le chien est l'ami de l'homme.

<sup>1</sup> 本研究は、平成27年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(15K02465)による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表すものである。

<sup>2</sup> このような見方はフランス語の冠詞の分析において支配的なものであり、Grevisse(1993), Wagner and Pinchon(1991), Leeman(2004)の他に、Deloffre et Hellegouarc'h(1988), Hollerbach(1994), Judge and Healey(1995), Price(2003)も同じ立場に立つ。Martinet(1979)は部分冠詞に関して、部分を表す«de»と現働化詞(注5参照)である定冠詞に分ける見方を提示しているが、基本的な考え方は共通していると言える。

the dog is the friend of the man “犬は人類の友である。”

また、Judge and Healey (1995)は、身体部位を表す名詞の前で用いられることを指摘している<sup>3</sup>。それには、様態を表す表現の一部をなす場合、属詞を伴う場合、所有者が明確でありかつ主語の位置にない場合のいずれかの条件を満たすことが必要である(p.29)。この用法は、所有形容詞の機能の一部を定冠詞が担っているものと考えられる。

(3) a. Elle marchait le dos courbé contre la pluie.

she walked the back bent against the rain

“彼女は雨に対して背を曲げて歩いていた。”

b. Il avait les mains sales.

he had the hands dirty “彼は手が汚かった。”

c. On risque de se casser le cou.

one threatens to break the neck “首の骨を折る危険がある。”

定冠詞の機能の理論的位置づけに関しては、Wagner et Pinchon(1991)が、談話において既に述べられているものを指示する照応的(anaphorique)用法と、最も大きな外延(extension)で捉えられる概念を喚起する一般化(généralisant)の機能とに大別している。前者は定冠詞の歴史的起源である指示形容詞の機能を継承しているのに対して、二つ目の用法は現代のフランス語が獲得した特徴である(pp.93-94)。Wagner et Pinchonによると、名詞以外のカテゴリーに属する語を名詞化する定冠詞の機能は、一般化の機能の中に位置づけられる。

Deloffre and Hellegouarc'h (1988)は、同類の他のものから当該要素を区別する排他性(exclusivité)という性質を、指示詞から継承していると述べている(p.137)。また、一般化の機能において不定冠詞と競合関係にあるが、不定冠詞は意識が個別化の方向に向けられるのに対して、定冠詞は一般化の方向に向けられる点で異なるとしている。

Martinet(1979)は、定冠詞は定(défini)<sup>4</sup>という意味以外には何らの意味的要素も含まないため、指示される対象が明確に同定されるという条件が満たされれば、あらゆる場合に使用可能であるとし、唯一性や総称性といった他の意味機能は定という中核的な意味や文脈によって引き出されると主張する(p.41)<sup>5</sup>。定を示す要素としては、他に所有形容詞や指示形容詞が挙げられるが、Leeman(2004)はこれらと定冠詞が異なるのは、定冠詞は指示対象の拡張(extensité)の境界を定めるという量化(quantifiant)の機能しかもたない中立的な要素であるのに対し、他の二つの要素は特徴づけ(caractérisant)という別の機能も併せ持っているという点であると述べている(p.63)。

## 2.2. イタリア語

<sup>3</sup> Price(2003)も同様の指摘をしている。

<sup>4</sup> 「定」とは、ある要素の存在が既に確立されていることを指す(Leeman(2004))。一般化も定の機能の一つであると考えられる。

<sup>5</sup> Martinet は、冠詞を現働化詞(actualisateur)というカテゴリーに属するものにとらえている。現働化とは、ある要素について現実性を喚起する作用を指し、その作用を行う要素が現働化詞である。名詞の場合は冠詞をはじめとする決定詞(déterminant)が現働化詞である。

イタリア語も、フランス語と同様に三つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞である。

Andorno(1999)によると、定冠詞は、話者と聞き手(ascoltatore)が知っている、あるいは同定可能(identificabile)であると話者(parlante)が認識している、定の指示を持つ名詞に伴う(p.35)。既知、もしくは同定可能である理由としては、本質的(intrinseco)なもの、テキストによるもの、語用論的なものがあげられている。

(4) Ho comprato una gonna e una giacca. La giacca mi va stretta.

I bought a skirt and a jacket the jacket me goes tight

“私はスカートと上着を買った。その上着は私にはきゅうくつだ。”

またこれとは別に、個体ではなく、クラス全体を指示する名詞にも伴う(p.36)。Sensini(1997: p.69)や Dardano and Trifone(1997: p.150)が述べているように、これは物質や抽象的概念の場合にも適用できる。

(5) a. I ragazzi devono praticare qualche sport.

the boys should practice some sport “少年は何かスポーツをするべきだ。”

b. Il petrolio non è inesauribile.

the petroleum not is inexhaustible “石油は無尽蔵ではない。”

c. La pazienza è una gran virtù.

the patience is a great virtue “忍耐は大いなる美德である。”

Sensini は、未知のものであっても指示対象を特定化する機能を持つ表現を伴う場合に定冠詞が用いられる用法や、特定の文脈において指示形容詞・指示代名詞・配分の意味をもつ不定形容詞・時の限定要素としての機能についても言及している。(p.69)。

(6) a. Il centro di Milano è sempre molto affollato.

the center of Milan is always very crowded

“ミラノの中心部はいつも込み合っている。”

b. Entro la settimana sapremo i risultati delle analisi.

within the week we will know the results of the analyses

“今週のうちに我々は分析結果を知ることになる。”

c. Dei due fratelli preferisco il più giovane.

of the two brothers I prefer the younger

“二人の兄弟のうち、私は弟の方が好きだ。”

d. Il lunedì pomeriggio vado in piscina.

the Monday afternoon I go to pool “毎週月曜日の午後私はプールに行く。”

e. Il mese scorso sono stato a Londra.

the month last I was in London “先月私はロンドンにいた。”

Renzi et al.(2001)は、これらに加えて所有物を示す定冠詞の機能を指摘している(p.400)。これは譲渡不可能所有でも譲渡可能所有でもありうる。前者の場合は所有形

容詞との交替は不可能であるのに対し、後者では可能である。

(7) a. Mi fa male la testa.

me makes pain the head “私は頭が痛い。”

b. Abbiamo perso le valigie.

we have lost the suitcases “私たちはスーツケースを失くした。”

(8) a. \*Mi fa male la mia testa.

me makes pain my head

b. Abbiamo perso le nostre valigie.

we have lost our suitcases

以上から、説明の表現方法に違いは見られるものの、フランス語とイタリア語の定冠詞の機能は基本的に共通していると言える。

### 3. フランス語の定冠詞のイタリア語における対応表現

本稿では、文学作品の原典とその翻訳を用いて両言語の定冠詞の分布を観察する。分析資料として用いるのは、フランス人作家アンドレ・マルロー(André Malraux)作の「人間の条件(La Condition humaine)」の一部とそのイタリア語訳(A. R. Ferrarin 訳)及びイタリア人作家イタロ・カルヴィーノ(Italo Calvino)作の「木のぼり男爵(Il barone rampante)」の一部とそのフランス語訳(Juliette Bertrand 訳)である。

本節では、フランス語の定冠詞がイタリア語においてどのような形式で対応しているかを観察する<sup>6</sup>。結果は以下のとおりである。

フランス語テキストにおける定冠詞のイタリア語における対応<sup>7</sup>

イタリア語においても定冠詞で現われているもの	3328(89.9)
イタリア語において指示形容詞で現われているもの	44(1.2)
イタリア語において所有形容詞で現われているもの	13(0.4)
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	262(7.1)
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	40(1.1)
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	14(0.4)
総数	3701(%)

これを、異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると、以下のようになる。

イタリア語において指示形容詞で現われているもの	44(11.8)
-------------------------	----------

<sup>6</sup> 本稿では、言語間の対応を見るために、一方のテキストにおいて生起する定冠詞を含む名詞句に、もう一方のテキストにおいて対応表現が見られない例は集計に含めていない。従って、テキストにおける定冠詞の実際の生起数はより大きいものとなる。

<sup>7</sup> 表中の百分率は、小数点以下第2位を四捨五入した数値である。従って、百分率の合計が100%にならない場合もある。

イタリア語において所有形容詞で現われているもの	13(3.5)
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	262(70.2)
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	40(10.7)
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	14(3.8)
総数	373(%)

ここで注目すべきは、ゼロ冠詞が対応する例の割合が比較的高いという点と、指示形容詞が対応する例の割合が低いという点である。ゼロ冠詞は定性という観点からは不定と位置付けられるもので、定である定冠詞とは対立する要素であるとみなすことができる。それにもかかわらず対応例が多いという事実は、定冠詞とゼロ冠詞について何らかの考察が必要となることを示唆している。この点については、4.2 節で論じることとする。

指示形容詞は、定性という観点からは定冠詞と同じく定と位置付けられる要素である。定冠詞と共通する性質を有することから、一定数の対応が見られることも予想されるが、実際には全体の 1.2%と低い割合でしか現れない。これは、フランス語の定冠詞とイタリア語の指示形容詞の間で、機能の共通性よりも相違点が際立っているためであると考えられる。この点について論じるには、イタリア語の定冠詞とフランス語の指示形容詞の対応についても考慮に入れなければならないため、次節で論じることとする。

また、不定冠詞への対応は全体の 1.1%となっている。定性に関して定冠詞と対立する要素であることから当然低いことが予想されるが、この数値は一定数の対応があることを示している。これについても後に考察することとする。

その他の対応については、いずれも低い割合でしか見られない。所有形容詞についても対応例が少ないという事実は、フランス語の定冠詞とイタリア語の所有形容詞との間に機能的共通性が少ないことを示していると言える。所有形容詞は名詞が指示する対象の所有者を示す要素であり、論理的には定性に関して定・不定の両方がありうる。イタリア語では基本的に所有形容詞が冠詞もしくは指示形容詞と共起し、定・不定のいずれにも対応し得る。

- (9) a. la tua casa      b. un suo amico      c. quel vostro errore  
       the your house      a his/her friend      that your error  
       “私の家”      “彼/彼女の友達”      “あの君たちの誤り”

定冠詞・指示形容詞と共起する例は定、不定冠詞と共起する例は不定と考えられる。このことから、イタリア語の所有形容詞はフランス語の定冠詞と定性に関して同じクラスに位置づけることができない。そもそも所有形容詞は、所有者を示すという機能がその本質的特徴であるのに対して、定冠詞は意味的に希薄な要素であるため、人称という独自の意味を持つ所有形容詞とは区別されて当然である。フランス語の定冠詞には所有者を指示する機能が限られているために、イタリア語の所有形容詞との対応

が少ないと考えることができる<sup>8,9</sup>。

#### 4. イタリア語の定冠詞のフランス語における対応表現

本節では、フランス語の定冠詞がイタリア語においてどのような形式で対応しているかを観察する。結果は以下のとおりである。

イタリア語テキストにおける定冠詞のフランス語における対応

フランス語においても定冠詞で現われているもの	3328(84.2)
フランス語において指示形容詞で現われているもの	44(1.1)
フランス語において所有形容詞で現われているもの	333(8.4)
フランス語においてゼロ冠詞で現われているもの	155(3.9)
フランス語において不定冠詞で現われているもの	80(2.0)
フランス語において上記以外の表現で現われているもの	13(0.3)
総数	3953(%)

これを、異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると、以下のようになる。

イタリア語において指示形容詞で現われているもの	44(7.0)
イタリア語において所有形容詞で現われているもの	333(53.3)
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	155(24.8)
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	80(12.8)
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	13(2.1)
総数	625(%)

フランス語の定冠詞とイタリア語の対応表現の場合と比較すると、フランス語における指示形容詞・不定冠詞の対応例の割合が低い点と、フランス語におけるゼロ冠詞の対応例の割合が比較的高い点が共通している。これに対して、イタリア語の定冠詞が

<sup>8</sup> 1.1でも述べたように、フランス語の定冠詞にも、所有形容詞と共通する機能をもつと考えられる例が存在する。

Il s'est lavé la figure.  
he himself washed the face “彼は顔を洗った。”

譲渡不可能な名詞句に定冠詞が添えられた場合、文の中に生起する要素が所有者として解釈される。一方、上記の例では英語では所有形容詞が用いられる。

He washed his face.

英語でも定冠詞が用いられる例もあるが、フランス語ほど頻繁には用いられないようである。このような機能は、1.2で述べたようにイタリア語の定冠詞も共有することから、フランス語とイタリア語の両言語において定冠詞が用いられることになる。

<sup>9</sup> イタリア語の定冠詞とフランス語の所有形容詞の対応の場合には異なる傾向が観察される。これについては4.1で考察する。

フランス語において所有形容詞で対応している例の割合が高い点が、フランス語の定冠詞とイタリア語の所有形容詞の対応の場合と異なっている。ゼロ冠詞・所有形容詞・不定冠詞の対応については、詳細に検討する必要があるので4節で取り扱うこととし、ここでは定冠詞と指示形容詞の対応について考察したい。

2節で述べたように、フランス語の定冠詞がイタリア語の指示形容詞に対応している例は、全体の1.2%と低い割合となっている。この傾向は、上の表に見られるように、イタリア語の定冠詞がフランス語の指示形容詞に対応している例の場合にも同様である(1.1%)。以下にそれぞれの言語において指示形容詞が対応している例を示す<sup>10</sup>。

### I. フランス語の定冠詞がイタリア語の指示形容詞に対応している例

(10) a. Notre père était un des rares nobles de la région qui eussent pris, au cours  
our father was one of the rare noblemen of the region who had taken in the course  
de la guerre, le parti des Impériaux. (BR p.16)  
of the war the side of the imperials

b. Nostro padre era tra i pochi nobili delle nostre parti che si fossero  
our father was among the few noblemen of our part who had  
schierati con gli Imperiali in quella guerra. (BR p.7)  
stood for the imperials in that war

“父はこの戦争では、近辺のごく少数の貴族にまじって皇帝派についた。”

### II. イタリア語の定冠詞がフランス語の指示形容詞に対応している例

(11) a. L'intrico dei fili spinati che attraversava la porta striava in nero lo  
the tangle of the barbed wires that crossed the door crossed out in black the  
spettacolo morto e la luce grigia, come le incrinature di una maiolica.  
sight dead and the light grey like the cracks of a piece of earthenware  
(CH p.249)

b. Les barbelés emmêlés au travers de la porte rayaient en noir ce spectacle  
the barbed wires tangles through the door crossed out in black this sight  
mort et le jour gris, comme les craquelures d'une faïence. (CH p.280)  
dead and the day grey like the cracks of a piece of earthenware

“戸口を横切って交錯している鉄条網が、瀬戸物に入ったひびのように、この死んだような風景と灰色の日差しの中で、黒い縞をつくっていた。”

定冠詞と指示形容詞は、定性という観点からは定という性質を共有しているが、定性以外の点で両者の機能が明確に区分され、その区分が両言語において共通しているためにこのような傾向が見られると考えられる。1節で見たように、Leeman(2004)は定冠詞とそれ以外の定の決定詞の相違点として、前者には特徴づけという機能がない点を指摘している。指示形容詞は、指示性の高さによって特徴付けを行っていると言え

<sup>10</sup> 例文には出典とページ数を示しており、CHと記されているのは「人間の条件」、BRは「木のぼり男爵」から収集したものであることを示す。



る。指示形容詞は、発話状況において存在する事物を直接指示する直示表現に代表されるように、極めて指示性の高い要素である。これに対して定冠詞は、談話において既に導入されているなどの理由によって、聞き手が名詞句の指示対象を容易に特定できるような状況において用いられる決定詞である。イタリア語の指示形容詞は、発話者からの距離によって二つの形式が区別されるのに対して、フランス語においてはそのような区別が基本的にはない、という体系的な相違が両言語の指示形容詞には見られるものの、指示性という観点からは両言語において共通の位置づけがなされているために、定冠詞との対応については低い割合でしか生起しないという結果となっていると考えられる。

## 5. 名詞句の文法的機能に関する分布

本節では、フランス語の定冠詞とイタリア語の定冠詞がそれぞれ異なる形式に対応している例の中で、特に数が多いものについて、当該名詞句が文において果たす文法機能がどのようになっているかを観察する。

### 5.1. イタリア語の定冠詞 フランス語の所有形容詞

イタリア語の定冠詞がフランス語において所有形容詞で現われている例は、333 例あり、全体の 8.4%を占めており、これはかなり高い割合であると言える。イタリア語において所有を表す定冠詞がどのような分布になっているかを見るためにこれを文法機能ごとに分けてみると、主なものは前置詞の目的語 187 例 (56.2%、うちフランス語で他の文法機能であったもの 15 例)、直接目的語 102 例 (30.6%、うちフランス語で他の文法機能であったもの 8 例)、主語 24 例 (7.2%、うちフランス語で他の文法機能であったもの 1 例)、付帯状況表現 15 例 (4.5%、うちフランス語で他の文法機能であったもの 1 例)となる。以下にそれぞれの例をあげる。

#### a. 前置詞の目的語

(12) a. Ma in fondo erano tutt'e due rimasti ai tempi delle Guerre di Successione,  
but at bottom had both remained in the times of the war of succession  
lei con le artiglierie per la testa, lui con gli alberi genealogici. (BR p.8)  
she with the artillery by the head he with the trees genealogical

b. Au fond, ils en étaient restés tous deux au temps des guerres de  
at the bottom they had remained both in the times of the war of  
Succession, elle avec les artilleries qu'elle avait dans la tête, lui avec ses  
succession she with the artillery that she had in the head he with his  
arbres généalogiques. (BR p.16)  
trees genealogical

“しかし本当のところでは、彼女は頭に砲術を、彼は樹形図を秘めながら、二人とも継承戦争の時代にとどまっていた。”

(13) a. Aprì la borchia della sua cintura, e si passò il cianuro nella tasca.  
he opened the buckle of his belt and passed the cyanide in the pocket

(CH p.254)

b. Il ouvrit la boucle de sa ceinture, et fit passer le cyanure dans sa poche.

he opened the buckle of his belt and passed the cyanide in his pocket

(CH p.288)

“彼はベルトの留め金をあけて、青酸カリをポケットに忍ばせた。”

## b. 直接目的語

(14) a. Del Cavalier Avvocato Carrega, poi, avevamo scoperto il fondo d'animo falso.

of the knight lawyer then we had found out the bottom of mind false

(BR. p.5)

b. Quant au Chevalier Avocat Carrega, nous avons découvert sa fausseté

as for the knight lawyer we had found out his falseness

foncière. (BR.14)

intrinsic

“カッレーガ騎士はというと、私たちはそのいんちきな心の底を見抜いてしまっていた。”

(15) a. Aprì malinconicamente la porta di camera sua, gettò la giacca sulla copia

he opened melancholically the door of room his threw the jacket on the copy

familiare dei *Racconti* di Hoffmann e si versò del *whisky*. (CH p.235)

familiar of the stories of and poured some whisky

b. Il ouvrit mélancoliquement sa porte, jeta son veston sur l'exemplaire

he opened melancholically his door threw his jacket on the copy

familier des *Contes* d'Hoffmann et se versa du whisky. (CH p.264)

familiar of the stories of and poured some whisky

“物憂げに部屋のドアを開けて、ホフマン物語の普及版の上に上着を投げ出してから、ウイスキーをついだ。”

## c. 主語

(16) a. Il dolore era diffuso in ogni parte del corpo, salvo la testa che era stata

the pain was diffuse in every part of the body except the head that had been

colpita da un pezzo di muro. (CH p.248)

hit by a piece of wall

b. Sauf à la tête, où l'avait frappé un morceau détaché de la maçonnerie, sa

except the head where him had hit a piece detached of the masonry-work his

douleur était diffuse. (CH p.280)

pain was diffuse

“煉瓦の破片で打ちつけた頭の他には、痛みの箇所ははっきり分らなかった。”

## d. 付帯状況表現

(17) a. E come mai fu trovato, dai servi accorsi insieme a nostro padre, con i

and how was found by the servant run up with our father with the

calzoni a brandelli, lacerati come dagli artigli d'una tigre? (BR p.10)  
trousers in tatters lacerated like by the claws of a tiger

b. Comment se fit-il que les domestiques, accourus en même temps que  
how happened it that the servants run up at same time as  
mon père, le trouvèrent en loques, sa culotte lacérée comme par les griffes  
my father him found in tatters his trousers lacerated like by the claws  
d'un tigre? (BR p.19)  
of a tiger

“父が召使たちとかけつけた時、まるで虎の爪にでも襲われたかのように、ズボン  
をずたずたに引き裂かれて発見されたのはどうしたことであろうか。”

フランス語において所有形容詞に対応している事実からも分かるように、これらの  
例においてイタリア語の定冠詞は所有の意味をもっていると言える。フランス語の定  
冠詞にも所有を表す機能はあるが、基本的に譲渡不可能名詞の場合に限られる。

(18) a. Il a baissé la tête.

he lowered the head “彼は頭を下げた。”

b. Il m'a lié les mains.

he me tied the hands “彼は私の手を縛った。”

これに対してイタリア語の定冠詞は、譲渡不可能名詞以外の名詞の場合にも所有の機  
能が見られる。上記の 333 例において用いられている名詞は 187 種類を数え、意味的  
に実に多様な名詞が数多く含まれている。このことから、イタリア語の定冠詞はフラ  
ンス語のそれと比較し、かなり広い範囲の意味に対応する名詞の所有を表す機能をも  
っていると考えられる。

最後に、文法機能における分布の偏りについて触れておきたい。この対応パターン  
において極めて高い割合を占めるのが前置詞の目的語と直接目的語であるが、これは  
定冠詞が所有の意味を表す場合、その名詞句の指示対象の所有者が主語で表されると  
いう構造が最も一般的であるためであると言える。主語以外の文法機能で最も多く生  
起するのはこの両者であるために、頻度が極めて高いのである。しかし、主語名詞句  
における定冠詞が所有の意味をもつ場合も一定数観察される。これは、間接目的語等  
の文中の要素が所有者を表したり、文脈によって所有者が了解されることが可能であ  
るためである。前者の用法は文中の先行詞によって束縛される再帰代名詞的機能、後  
者は人称代名詞と同様に比較的遠い位置にある要素と同一指示となる代名詞的機能と  
捉えることができる<sup>11</sup>。このように、所有者が構造上、あるいは文脈上明らかな場合  
において、イタリア語では定冠詞の所有を表す機能がかなり広い範囲で許容されると言  
える。

<sup>11</sup> 生成文法の観点からは、再帰代名詞的機能は照応表現(anaphor)、代名詞的機能は代名詞表現(pronominal)にそれぞれ対応するものである。

## 5.2. フランス語の定冠詞 イタリア語のゼロ冠詞

フランス語の定冠詞がイタリア語においてゼロ冠詞で現われている例は、262 例あり、全体の 7.1%を占めている。この中で、語彙的な要因でイタリア語においてゼロ冠詞が用いられている例が一定数存在する。具体的には、不定代名詞 *un, uno* が用いられる例において、フランス語では定冠詞が伴うのに対してイタリア語ではゼロ冠詞となるが、この例は 22 例見られた。これ以外の例は、語彙的な要因以外で冠詞の対応が異なっていることになるが、ここで文法的機能によってその分布を見ていく。

最も多く見られたのは、フランス語でもイタリア語でも前置詞の目的語として現れている例であるが、159 例あった。これは、語彙的要因による 22 例を除いた 240 例のうち 66.3%を占めている。以下に例をあげる。

(19) a. Au loin, une maison à cornes et une file de poteaux qui plongeaient,  
in the distance a house with horns and a line of posts that plunged  
en serapetissant, vers la campagne qu'il ne reverrait pas. (CH p.280)  
shrinking toward the countryside that he not would see again

b. In lontananza, una casa dal tetto lunato, e una fila di pali che  
in distance a house with the roof semilunar and a line of posts that  
affondavano, rimpicciolendosi, verso la campagna che non avrebbe mai più  
plunged shrinking toward the countryside that he not would never more  
rivisto. (CH p.249)  
see again

“遠くには、屋根の端が角のように突き出た家と電信柱の列があり、それはだんだん小さくなりながら、もう二度と見ることもないであろう野原の方へと連なっていた。”

(20) a. Quand le Chevalier Avocat apportait à la maison un panier d'escargots  
when the knight lawyer brought to the house a basket of snails  
comestibles, on mettait les bestioles à la cave dans un tonneau où elles  
edible they put the bugs into the cellar in a barrel where they  
jeûnaient tout en avalant du son qui les purgeait. (BR p.21)  
fasted swallowing some bran that them purged

b. Come il Cavalier Avvocato portava a casa un canestro pieno di lumache  
as the knight lawyer brought to house a basket full of snails  
mangerecce, queste erano messe in cantina in un barile, perché stessero  
edible these were put into the cellar in a barrel so that they could be  
in digiuno, mangiando solo crusca, e si purgassero. (BR p.11)  
in fasting eating only bran and were purged

“弁護士騎士が食用カタツムリを一杯に入れた籠を家に持って来ると、ふすまの他は何も食わずに体内をきれいにさせるために蔵の樽の中に入れられる。”

フランス語では他の文法機能であったものがイタリア語において前置詞の目的語とし

て生起している例が 28 例あり、これを合わせると、イタリア語において前置詞の目的語となっている例においてゼロ冠詞が対応している例は 187 例となって、240 例のうち 77.9%にもものぼる。これは、前置詞の目的語においてゼロ冠詞が対応する割合がかなり高いことを示している。

次に多いのは直接目的語で 12 例あり、フランス語では他の文法機能であったものがイタリア語において直接目的語として生起している例は 3 例である。これを加えた割合は 6.3%となる。これと並んで多いのは同格名詞句で 8 例あり、フランス語では他の文法機能であったものがイタリア語において同格名詞句として生起している例は 7 例である。これを加えた割合はやはり 6.3%である。これ以外の文法機能の例は散発的で、呼格 8 例、主語 5 例、属詞 5 例（うちフランス語で他の文法機能であったもの 1 例）などとなっている。以上の結果から、前置詞の目的語の機能を果たしている例が圧倒的に多く、直接目的語と同格名詞句がそれに続き、それ以外の機能はそれほど重要な位置を占めてはいないということが分かる。

この文法機能に関する傾向から、フランス語の定冠詞がイタリア語においてゼロ冠詞に対応している理由について、一つの要因が考えられる。それは固定化された表現になる場合が多いという傾向である。前置詞句という単位は、前置詞とその目的語が固定化された単位を形成し、一つの語彙的表現として用いられることが比較的多い。また、直接目的語も動詞とともに固定化された動詞句表現として用いられることがある。表現として固定化されると、一般に冠詞が脱落するという傾向が見られる。以下に具体例をあげる。

(21) a. Il s'assit sur une branche qui dominait la mienne et se mit à y faire des  
he sat on a branch that dominated mine and began to there make some  
encoches avec sa petite épée, comme s'il se refusait à m'adresser la parole.  
notches with his small sword as if he refused to me put the word  
(BR p.41)

b. Si sedette su un ramo del gelso più in su di me e si mise a farci delle  
he sat on a branch of the mulberry more above me and began to make there some  
tacche con lo spadino, come se non volesse rivolgermi parola. (BR p.28)  
notches with the small sword as if he not wanted put me word

“私より高い桑の枝に腰をおろし、まるで私にことばをかけたくないというように、そこで剣でしるしを刻みつけはじめた。”

(22) a. Pas marié : histoire de femmes. Soupçonné de fumer l'opium. (CH p.329)  
not married story of ladies suspected to smoke the opium

b. Senza moglie: una certa nomea di donnaiolo: sospettato di fumar oppio.  
without wife a certain infamy of lady killer suspected to smoke opium  
(CH p.287)

“彼は結婚していなかった。女性関係の噂がたっていた。阿片常用者と思われていた。”

上記の *rivolgere parola* (言葉をかける), *fumar oppio* (阿片を吸う) に加えて他に該当する例としては、*apparecchiare tavola* (食卓の準備をする), *avere tempo di* (~する時間がある), *toccare terra* (上陸する、地面に足をつける) があり、動詞と名詞が固定的に結びつき、特定の概念を表す表現となっている。

同格名詞句については、一般に無冠詞として生起する例が両言語において数多く観察される。フランス語における同格名詞句としての定冠詞名詞句がイタリア語の無冠詞名詞句に対応している 8 例についてはその理由は定かではないが、フランス語において他の文法機能を持つ定冠詞名詞句がイタリア語において同格名詞句として生起している例が 7 例あることから、同格名詞句とゼロ冠詞との緊密な関係が現れていると考えることができる。

以上に見られる傾向に対して、文法機能として重要である主語としての例は極めて少ない。主語という要素は、統語的に動詞句の外にあると分析されることが多いように、固定化された熟語表現の一部を形成することは多くはない<sup>12</sup>。このことが、前置詞の目的語や直接目的語にゼロ冠詞が多く見られたのに対して、主語において少ないという事実の一つの要因となっていると言えよう。

表現の固定化と並んで大きな要因と考えられるのは、名詞句自体の文法的属性である。Renzi et al.(2001)は、イタリア語においては複数の不定名詞句が動詞に後続する場合に無冠詞名詞句が比較的多く観察されるのに対し、単数名詞句については非連続的な要素を指示する名詞句<sup>13</sup>はその生起がかなり限られていると述べている (pp.389-391)。実際、イタリア語で無冠詞名詞句で現われている例のうち複数名詞句は 23 例を占めている。これは 240 例のうちの 1 割弱の割合であり、それほど多いとは言えないが、やはり一つの要因であると言えよう。

(23) a. Le dos de la colline, plus sombre, était couvert d'olivieraies ; derrière, le  
the back of the hill darker was covered of olive groves behind the  
hameau d'Ombreuse offrait ses toits de tuiles décolorées et d'ardoises ;  
hamlet of offered its roofs of tiles bleached and of slate-grey  
en bas, on voyait pointer les antennes des bateaux : là se trouvait le port.  
below one sawpoint the antennas of the ships there stood the harbour

(BR p.26)

b. Il dosso era scuro di oliveti, e, dietro, l'abitato d'Ombrosa sporgeva i suoi  
the back was dark of olive groves and behind the village of stuck out its  
tetti di mattone sbiadito e ardesia, e ne spuntavano pennoni di  
roofs of tiles bleached and slate-grey and there rose antennas of  
bastimenti, là dove sotto c'era il porto.  
ships where below was the harbour

(BR p.16)

<sup>12</sup> 生成文法をはじめとする統語理論において、文の構造において主語が階層的に高い位置に位置づけられることは、このような言語直観を反映しているものと言える。

<sup>13</sup> 一般に「数えられる」要素と呼ばれるものは、意味論的には「非連続的な」要素と捉えられ、「数えられない」要素は「連続的な」要素と捉えられる。

“ 尾根はオリーブの木で黒々としており、後ろにはオンブローザの屋敷が色あせた煉瓦とスレートの屋根をのぞかせ、その下が港になっているところでは船の帆柱がそそり立っていた。”

Fujita(2013)では両言語の不定冠詞の分布が検討されているが、この中でイタリア語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起する割合が高いことが示されている。ゼロ冠詞の生起が多く観察される傾向が、不定冠詞のみならず定冠詞に対する対応表現にも見られるという点で興味深い。

### 5.3. イタリア語の定冠詞 フランス語のゼロ冠詞

イタリア語の定冠詞がフランス語においてゼロ冠詞で現われている例は、155 例あり、全体の 3.9%を占めている。フランス語の定冠詞がイタリア語においてゼロ冠詞で現われている割合は 7.1%であったので、イタリア語に比べてフランス語ではゼロ冠詞の生起する割合が低いと言える。フランス語におけるゼロ冠詞の機能について、Martinet(1979)は無冠詞名詞句、すなわち現働化詞を伴わない名詞は現働化されていないのではなく、現働化詞以外の手段、すなわち文脈や統語的環境によって現働化されていると説く。文脈や統語的環境にこのかなり強い制約が存在するために、4.2 で述べたように、イタリア語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起する割合が高い傾向が観察されるのである。

以上の点を踏まえて当該例を文法機能ごとに分けてみると、多く見られるのは前置詞の目的語 97 例(うちイタリア語で他の文法機能であったもの 12 例)、並列表現が 16 例(うち直接目的語が 8 例、付帯状況表現が 4 例)、主語が 13 例、付帯状況表現が 11 例(うちイタリア語で他の文法機能であったもの 3 例)、直接目的語が 9 例となる<sup>14,15</sup>。以下に前置詞の目的語、並列表現、主語、付帯状況表現の例をあげる。

#### a. 前置詞の目的語

(24) a. o una testa di porco dalla cui bocca usciva, come cacciasse fuori la lingua,  
or a head of pork from whose mouth came out as it pulled out the tongue  
un'aragosta rossa, e l'aragosta nelle pinze teneva la lingua del maiale come  
a lobster red and the lobster in the pincers had the tongue of the pork as  
se gliel'avesse strappata. (BR p.11)  
if to-it it had pulled out

b. D'une tête de porc sortait, comme si le porc eût tiré la langue, une  
from a head of pork came out as if the pork had pulled the tongue a  
langouste bien rouge, et les pinces de la langouste présentaient à leur  
lobster quite red and the pincers of the lobster showed in their  
tour la langue de porc comme si elles la lui eussent arrachée. (BR p.20)  
turn the tongue of pork as if they it to-it had pulled out

<sup>14</sup> 前置詞 en は基本的にゼロ冠詞を伴う名詞句を選択するという語彙的特性をもつが、en 以外の前置詞についても、その目的語にゼロ冠詞が多く観察される。

<sup>15</sup> この中で、付帯状況を表す要素が並列表現として生起している例は、付帯状況表現と並列表現の両者に重複して数えられている。

“ 豚の頭は口から舌を出しているように真っ赤な伊勢エビを吐き出し、エビのはさみの間にはちゃん切られでもしたかのように豚の舌が置かれている。”

(25) a. Arriva il vescovo, il missionario batte la solfa: silenzio: i selvaggi sono  
arrives the bishop the missionary beat the time silence the savages are  
paralizzati dal rispetto. (CH p.265)  
paralyzed from the respect

b. L'évêque arrive, le missionnaire bat la mesure : silence, les sauvages sont  
the bishop arrives the missionary beat the time silence the savages are  
paralysés de respect. (CH p.301)  
paralyzed from respect

“ 偉い坊さんがやって来て、宣教師が拍子を取ってもしんとしてる。野蛮な奴らはかしくまって固くなっていたんだ。”

b. 並列表現

(26) a. Correva sul cavallino bianco le strade e i sentieri, e quando vedeva  
she was running on the poney white the roads and the paths and when she saw  
frutta matura in frutteti incustoditi, li avvertiva. (BR p.44)  
fruit ripe in orchards unattended she them informed

b. Elle courait routes et sentiers sur son poney blanc et les avertissait dès  
she was running roads and paths on her poney white and them informed as  
qu'elle voyait des fruits mûrs dans un verger sans gardien. (BR p.61)  
soon as she saw some fruits ripe in an orchard without guard

“ 白い子馬を街道や小道に走らせ、番人のいない果樹園に熟れた果物を見つけると、彼らに教えてやるのだった。”

c. 主語

(27) a. Tuttavia sentiva, fino al desiderio di vomitare, l'umiliazione che sentono  
and yet he felt even the desire to vomit the humiliation that feel  
tutti gli uomini davanti ad un uomo da cui dipendono. (CH p.253)  
all the men before a man on whom they depend

b. Pourtant, il ressentait jusqu'à l'envie de vomir l'humiliation que ressent tout  
and yet he felt even the urge to vomit the humiliation that feels every  
homme devant un homme dont il dépend. (CH p.286)  
man before a man on whom he depends

“ だが彼は、自分をなんとでもできる人間の前で感ずるあの屈辱を、吐き気がするほど感じていた。”

b. 付帯状況表現

(28) a. Dischiuse le mani, se le portò sul ventre con un gemito acuto, cadde colle  
he opened the hands them drew on the belly with a moan acute fell with the  
spalle in avanti, tra le gambe di Hemmerlich, poi si accasciò tutto  
shoulders forward between the legs of then discouraged all



in una volta. (CH p.251)  
at once

b. Il ouvrit les deux mains, les ramena à son ventre avec un gémissement aigu,  
he opened the two hands them drew to his belly with a moan acute  
tomba, épaules en avant, entre les jambes d'Hemmerlich, puis se détendit  
fell shoulders forward between the legs of then relaxed  
d'un coup. (CH p.283)  
suddenly

“彼は両手を開いて、鋭いうめき声とともに、その両方を腹の上に持っていくと、  
両肩を前に突き出して、ぱったりとエンメルリックの両脚の間に倒れた。”

割合で見ると、前置詞の目的語が 62.6%、並列表現が 10.3%、主語が 8.4%、付帯状況表現が 7.1%、直接目的語が 5.8%となっている。フランス語の定冠詞がイタリア語のゼロ冠詞に対応している場合と比較すると、前置詞の目的語の割合がかなり高い点は共通しているのに対し、並列表現、主語、付帯状況表現の割合が目立つのが特徴的である。前置詞の目的語が多いのは、4.2 で述べたように無冠詞名詞句が固定化された表現に多く用いられるという理由によるものであると考えられる。並列表現については、フランス語の特に文語においてゼロ冠詞が生起する例が比較的多く観察される。この傾向については Grevisse(1993)が指摘しており、表現に生き生きとした印象を与えるとしており(p.880)、フランス語における文体的な特徴であるにとらえることができよう。

主語、直接目的語においてゼロ冠詞が一定数観察されるのは、予想に反する傾向である。フランス語では通常の文法機能においてゼロ冠詞が生起するのは例外的であるからである。しかし、詳細に検討してみるとその理由が明らかになる。主語については肩書等を表す固有名詞的表現であるか量化詞 *tout* と共起する例であった。これは、フランス語におけるゼロ冠詞の機能の一つと考えられるものであり、主語という特定の文法機能と結び付けられるものではない特殊例であるにとらえるべきものである。直接目的語においては、avoir avantage à「～したほうがよい」、donner conscience de「～を意識させる」、donner soif de「～を渴望させる」、prendre soin de「～の世話をする」、tenir parole「約束を守る」のように動詞句の固定表現として生起している例が多く、これは前置詞の目的語の例と同じものと考えられる。また、それ以外の例も、主語の場合と同じく肩書、*tout* との共起というゼロ冠詞の特定の機能によるものである。

付帯状況表現については、文の中での機能が叙述的なものであることから、特定的な名詞句というよりは全体として形容詞に近い機能を持っていると言える。叙述的な文脈で用いられる名詞句はゼロ冠詞で生起することが珍しくはないフランス語では、この傾向はそれほど驚くべきものではないと言える。ただし、イタリア語においても叙述的な機能を果たす名詞句はゼロ冠詞で生起する傾向は観察されることから、なぜフランス語においてのみゼロ冠詞が生起するのかという疑問は残る。一つの可能性は、

書き手の文体的な特徴である。該当例 11 例から既述の並列表現を除くと 7 例となるが、このうちの 6 例は「人間の条件」の原典からのものである。従って、このゼロ冠詞の使用はアンドレ・マルロー個人の文体的特徴に帰せられる可能性が考えられる。この点に関しては、他のコーパスを参照することによって検証する必要がある。

#### 5.4. 不定冠詞との対応

ここでは、それぞれの言語の定冠詞に別言語において不定冠詞が対応している例について考察する。フランス語の定冠詞がイタリア語の不定冠詞に対応している例は全体の 1.1% であり、イタリア語の定冠詞がフランス語の不定冠詞に対応している例は 2.0% となっている<sup>16</sup>。

既に述べたように定冠詞と不定冠詞は定性に関して対立する要素であり、本来対応することはまれであるように予想される。しかし、今回の調査によって得られた数値は決して低いと断言できるものではない。これは、言語運用において、定と不定という対立が絶対的なものとは限らず、若干の連続性をもっていると考えることができる。Fujita(2013)では、不定冠詞の分布の観察をもとにして、不定冠詞と定冠詞の機能は必ずしも相反するものではなく、両者の関係は連続的なスケールでとらえられるものであると論じている。定冠詞の分布をもとにしても、同様の傾向が見られると言える。

ここで、一つ注目すべき事実がある。それは、フランス語において不定冠詞が対応している割合が、イタリア語において不定冠詞が対応している割合の 2 倍近い数値となっている点である。これには、フランス語においてはいわゆる冠詞の生起の義務性が高いという特性が関わっている。定の名詞句に定冠詞をはじめとする決定詞の生起がほぼ義務的である点については他のロマンス諸語はもちろんのこと、英語等の他言語においても観察される傾向である。これに対して、不定の名詞句に関しては、単数の非連続的な要素をさす名詞以外の場合にはその生起が随意的である言語がほとんどである。ロマンス諸語においては、スペイン語にはいわゆる不定冠詞複数形は存在せず、連続的な要素をさす名詞と共起する不定の冠詞もない。イタリア語においてはいわゆる部分冠詞がそれに相当するが、その生起は決して義務的ではなく、すでに述べたようにゼロ冠詞が生起する場合が少なくない。

これに対して、フランス語においては非連続的な要素をさす複数名詞と共起する不定冠詞複数形、連続的な要素をさす単数名詞と共起する部分冠詞の生起がほぼ義務的であると言える。このイタリア語とフランス語の不定の要素と共起する冠詞の特性の違いが、上記の数値の違いとなって現れていると考えることができる。実際、フランス語において部分冠詞及び不定冠詞複数形が対応している例は全 80 例中 36 例で 45% を占めている<sup>17</sup>。

文法機能別に見てみると、まずイタリア語において不定冠詞が現れている全 40 例のうち、最も多いのは前置詞の目的語で 21 例(52.5%)、次いで多いのが直接目的語で 11

<sup>16</sup> 本稿における分類でのフランス語の不定冠詞の内訳には、いわゆる部分冠詞も含まれている。これは、定・不定という概念をもとにすると、不定冠詞が部分冠詞と同じカテゴリーに属すると考えられるからである。

<sup>17</sup> うち 1 例は非存在を表す *de* を含んでいる。この *de* は部分冠詞の変種であると考えることができる。

例 ( 27.5%、うちフランス語で他の文法機能であったもの 3 例 )、主語 3 例 ( 7.5%、うちフランス語で他の文法機能であったもの 1 例 ) となっている。以下に例をあげる。

a. 前置詞の目的語

(29) a. Gisors déjà le prenait par le bras. (CH p.275)

already him took by the arm

b. Gisors lo prendeva già per un braccio. (CH p.245)

him took already by an arm

“ジゾールはすでに彼の腕をつかんでいた。”

b. 直接目的語

(30) a. Le sol est à vous, oui, et si j'y posais le pied, c'est vrai que je  
the ground is yours yes and if I there put down the foot it is true that I  
m'égarerais sur vos terres. (BR. p.34)

would ramble on your lands

b. ... perché vostro è il suolo, e se ci posassi un piede allora sarei uno  
as yours is the ground and if there I put down a foot then I would be one  
che s'intrufola. (BR.23)

that pokes in

“だってあなたたちの地面だからね、で、もし僕が足をつけたら紛れ込んだとい  
うことになるよね。”

c. 主語

(31) a. Le sourire frémissant que nous lui voyions aux lèvres nous avertissait  
the smile quivering that we him saw at the lips us informed  
qu'elle l'avait vu, que, réellement, il était là ! (BR p.65)

that she him had seen that really he was there

b. Da come le appariva sulle labbra un trepido sorriso capivamo che  
from how him appeared on the lips a nervous smile we understood that  
l'aveva visto, che lui era lì davvero! (BR p.47)

he him had seen that he was there really

“口もとにほのかな微笑を浮かべるので、私たちは彼を見ており、彼は本当にそ  
こにいるのだと知るのだった。”

これに対して、フランス語において不定冠詞が現れている全 80 例のうち、最も多いの  
は直接目的語で 34 例 ( 42.5%、うちイタリア語で他の文法機能であったもの 4 例 )、  
次いで前置詞の目的語 24 例 ( 30%、うちイタリア語で他の文法機能であったもの 2 例 )、  
主語 9 例 ( 11.3%、イタリア語で他の文法機能であったもの 2 例 )、名詞文 5 例 ( 6.3%、  
イタリア語で他の文法機能であったもの 2 例 ) となっている。以下に例をあげる。

a. 直接目的語

(32) a. Hemmerlich s'accorse di non saper adoperare la mitragliatrice. (CH p.247)

realized of not know use the machine gun

b. Et Hemmerlich s'aperçut qu'il ne savait pas servir une mitrailleuse.

and realized that he not knew use a machine gun

(CH p.279)

“エンメルリックは自分が機関銃の扱い方を知らないことに気付いた。”

b. 前置詞の目的語

(33) a. I Della Mela mai vollero ammettere che loro figlio avesse attentato all'onore

the of the apple never wanted admit that their son had infringed the honour

di Battista e consentire al matrimonio.

(BR p.10)

of and agree to the marriage

b. Les de la Pomme ne voulurent jamais admettre que leur fils eût attenté à

the of the apple not wanted ever admit that their son had infringed

l'honneur de Baptiste, ni consentir à un mariage.

(BR p.19)

the honour of nor agree to a marriage

“デラ・メーラ家では自分たちの息子がバッティスタの名誉を汚そうとしたのだと決して認めようとはせず、結婚に同意しようとしなかった。”

c. 主語

(34) a. I rampichini, rapidissimi uccelli color marrone picchiettato, si posavano

the nuthatches very fast birds colour marron speckled settled

sulle fronde fitte d'aghi, in punta, in posizioni sghembe.

(BR p.59)

on the branches covered with needles on tip in position diagonal

b. Des sittelles, oiseaux rapides de couleur marron moucheté, se posaient tout

some nuthatches birds fast of colour marron speckled settled quite

en biais au bout des branches chargées d'aiguilles.

(BR p.78)

on bias at the end of the branches covered with needles

“斑のある栗色をしたすばしっこいキツツキが、びっしり茂った松葉の上の先のほうに、身を斜にしてとまっていた。”

前置詞の目的語と直接目的語が多いのは他の場合と同様であるが、主語が一定数見られるのが特徴的である。定冠詞と不定冠詞の機能的連続性が、多くの文法機能において見られることを示していると言えよう。

以上のことから、定冠詞と不定冠詞に見られる若干の機能的連続性に加えて、フランス語における不定冠詞・部分冠詞の義務性という特性によって、両言語間の定冠詞と不定冠詞の対応関係がとらえられる。

## 6. 結論

フランス語とイタリア語における定冠詞の分布と他の要素との対応関係をもとに、両言語における定冠詞の特性を対照的に考察してきたが、両言語における共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

- 共通点 i) 指示性の高さという点において性質が異なる指示形容詞との機能分化が明瞭である。
- ii) 定性の値が異なる不定冠詞との機能分化がある程度なされているが、定冠詞に不定冠詞が対応している例が一定数観察される。このことから、定冠詞と不定冠詞の間に若干の機能的連続性が存在すると考えられる。
- iii) ゼロ冠詞との交替が一定の割合で観察される。その中で、前置詞の目的語となっている例の割合が最も高い。
- 相違点 i) イタリア語の定冠詞がフランス語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、フランス語の定冠詞がイタリア語の所有形容詞に対応する例は少ない。このことから、イタリア語の定冠詞はフランス語の所有形容詞が担う機能の一部を担っていると言える。
- ii) フランス語の定冠詞にイタリア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、イタリア語の定冠詞にフランス語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。
- iii) イタリア語の定冠詞にフランス語の不定冠詞が対応している例の方が、フランス語の定冠詞にイタリア語の不定冠詞が対応している例よりも多い。

以上の結果から、両言語の定冠詞は基本的な性質を共有しているものの、一部でその機能に相違点があると言える。特に、所有を表す機能に関する両言語の定冠詞の違いは従来指摘されることの少なかった特徴であり、文法機能について分布に偏りが見られることは言及されていない言語事実である。また、イタリア語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという筆者の従前の研究における特徴付けが、本稿での調査によって再確認された。この特徴は、同じロマンス諸語に属する両言語の相違点として注目すべき点であると言える。ただし、今回の調査で新たに分かったことは、フランス語においてもゼロ冠詞の生起が決してまれではないという事実である。他の要素、例えば指示形容詞や不定冠詞の生起例の割合に比べると明らかに高い数値を示しており、フランス語においても一定の環境において比較的指示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが示されたと言える<sup>18</sup>。

本稿に続く研究として、指示形容詞や所有形容詞をもとにした調査を行って、双方向的に分析を進めていくことを今後の課題としたい。

#### 参考文献

- Andorno, Cecilia (1999) *Dalla grammatica alla linguistica*, Paravia, Torino.
- Batchelor, R. E. and M. Chebli-Saadi (2011) *A Reference Grammar of French*, Cambridge University Press, Cambridge.

<sup>18</sup> 査読委員より、前置詞の目的語となっている環境で現れるゼロ冠詞の多くは慣用的用法で、指示性が低いのではないかという指摘があった。確かにそのような傾向があり、フランス語におけるゼロ冠詞名詞句の全てにおいて指示性が高いとは言えない。ただ、前置詞の目的語も含めて、指示性の高い表現が一定数は観察されると言える。

- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de linguistique générale, 1*, Gallimard, Paris.
- Dardano, Maurizio and Petro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- Deloffre, Frédérique and Jacqueline Hellegouarc'h (1988) *Éléments de linguistique française*, Editions C.D.U. et SEDES réunis, Paris.
- Fujita, Takeshi (2013) “Distribuzione sintattica dell’articolo indeterminativo in italiano e in francese”, 『北海道大学文学研究科紀要』, 第 140 号, pp.99-129 .
- Grevisse, Maurice (1993) *Le bon usage*, Duculot, Paris.
- Hollerbach, Wolf (1994) *The Syntax of Contemporary French*, University Press of America, Lanham.
- Iorio, Raffaele (1996) *La grammatica della lingua francese d’oggi*, Loffredo Editore, Napoli.
- Judge, Anne and F. G. Healey (1995) *A Reference Grammar of Modern French*, NTC Publishing Group, Lincolnwood.
- Leeman, Danielle (2004) *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Presses Universitaires de France, Paris.
- Louette, Henri (1987) *Nouvelle grammaire de la langue italienne*, Éditions Roudil, Paris.
- Luciani, Giovanni and Yves Guiraud (1998) *Grammatica pratica del francese dalla A alla Z*, Editore Ulrico Hoepli, Milano.
- Maiden, Martin and Cecilia Robustelli (2000) *A Reference Grammar of Modern Italian*, Arnold, London.
- Maingueneau, Dominique (1994) *L’énonciation en linguistique française*, Hachette, Paris.
- Martinet, André (1979) *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier, Paris.
- Price, Glanville (2003) *A Comprehensive French Grammar*, Blackwell Publishing, Malden.
- Proudfoot, Anna and Francesco Cardo (2013) *Modern Italian Grammar*, Routledge, London and New York.
- Renzi, Lorenzo et al. (2001) *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.
- Sensini, Marcello (1997) *La grammatica della lingua italiana*, Oscar Mondadori, Milano.
- Serianni, Luca (1997) *Italiano*, Garzanti Editore, Milano.
- Tartaglino, Anna Cazzini and Véronique Gfeller (1993) *Grammatica francese*, Avallardi, Milano.
- Trifone, di Pietro and Massimo Palermo (2000) *Grammatica italiana di base*, Zanichelli, Bologna.
- Ulysse, Odette and Georges Ulysse (1988) *Précis de grammaire italienne*, Hachette, Paris.
- Vallé, Annette (2003) *Guide de grammaire italienne avec exercices*, Éditions De Boeck, Bruxelles.
- Wagner, Robert Léon and Jacqueline Pinchon (1991) *Grammaire du Français classique et moderne*, Hachette, Paris.

#### 引用テキスト

- André Malraux (1946) *La condition humaine*, Gallimard, Paris.
- André Malraux (1997) *La condizione umana*, Traduzione di A. R. Ferrarin, Bompiani, Milano.
- Italo Calvino (1993) *Il barone rampante*, Arnoldo Mondadori Editore, Milano.
- Italo Calvino (2001) *Le baron perché*, traduit par Juliette Bertrand, Éditions du Seuil, Paris.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail：fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学